九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[003]社会教育研究紀要表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/4480692

出版情報：社会教育研究紀要. 3, 2021-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

はじめに

岡　　幸　江

ここに本研究室として第３号となる『社会教育研究紀要』を刊行することになった。今回も、第２号同様に、特集を中心とした号である。今回の特集テーマに掲げた「離島の単独自治体・長崎県小値賀町にみる地域と教育」自体も、第２号でとりくんだ「地域変動と社会教育」共同研究の、有志による継続研究に基づいている。

2021年現在、社会は新型コロナ・パンデミックによって大きく変容し、研究に携わる我々も、この潮流に大きな影響を受けている。今回の小値賀研究は、ちょうど筆者がスコットランドへ訪問研究に出ていた最中の2019年６月に、前回研究をまとめた論文を目にした北松西高校福田校長から海を越えてメールで連絡を頂いたことに始まった。その後、訪問・調査は、帰国後の同11月、あけて2020年２月、同３月の計３回にわたった。最後の訪問時には、すでに高校はコロナ休校期間に入っており、調査も慎重を要するところとなっていた。その後本格的にコロナ禍に突入し、いまなお島へ渡ることは簡単ではない。今回の共同研究は我々のビフォー・コロナ最後の研究調査となった。一方、コロナ期に入り我々の眼前に新たに登場したZoomシステムを用いることで、異なる地に住みながらも、思わぬ利便性をもって共同協議を重ねることができた側面もある。今回の論文群には、こうした時代性が背後にある。

コロナ禍に大学も翻弄されるなかで、脱稿への道は平坦ではなかった。それでも刊行に至ることができたのは、ひとえに小値賀島の関係みなさんが、われわれの研究を正面からうけとめ、また期待をもって応援・協力し続けてくださったことが大きい。それは研究者としてこの上なくありがたいことである。今回の諸論文がどこまで現場の奮闘、そして我々へのエールに応答できたかは心もとない。せめて、今われわれは、この紀要を携えて再び直接小値賀を訪れ、あの島の空気のもとで報告とともに議論いただけることを願っている。改めて、お世話になった小値賀町の皆様にこの場を借りて御礼申し上げたい。

また本号では、本研究室社会人大学院ＯＢでもある森千鶴子氏に、自身がとりくんできた食の地元学に関する原稿を寄稿いただいた。研究室として長く学部院生ぐるみでとりくんできた「地元学」に関する特集をくむことも念頭においてきたが、いまだ実現できずにいる。そうしたなかでまずはわれわれに「地元学」の風をもたらし、我々が「日常生活に学ぶ」ことへのまなざしを深めていくことを支えてくれた森氏に、原稿をお願いした。今後なんらかのかたちで、社会教育による「日常生活」へのアプローチを、本研究室らしく形にしていきたいとも考えている。

なおこの間、本紀要を毎年の定期刊行とするには難しかったのは、博士課程にあがる院生に乏しかったことが背景にあった。だがここに至り本研究室もようやく、博士課程昼間院生・修士課程昼間院生・留学生・社会人院生がバランスよく参加する豊かな大学院陣容となって、議論も活性化している。こうしたなか、次号は院生による論文投稿を中心とした定期刊行を想定し、現在の研究室の活性化具合を反映しうる紀要発行を目指したいと考えている。

今後一層、学外の研究室・研究者と社会にひらかれた研究室をめざし、意味ある発信のありかたを模索していきたい。一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げる次第である。

2021年３月